

## 栃木県におけるノビタキの繁殖分布と繁殖環境

遠藤孝一<sup>1</sup>・平野敏明<sup>2</sup>

### はじめに

ノビタキ *Saxicola torquata* は、日本には夏鳥として本州の高原や北海道の平野部から山地帯の草原に渡来し繁殖するが、本州における本種の生息地は極めて限られている。これは、本州におけるノビタキの生息環境の分布と深くかかわっていることが考えられている(日本野鳥の会 1978)。

しかし、日本においてはノビタキとその生息環境とのかかわりについて、現在まで詳しい調査は行われていない。高原の開発、観光地化にともない、その生息数の減少が危ぶまれている現在、上記の事項を明らかにすることは、ノビタキの保護を考える上で重要と思われる。

このような見地から、筆者らは、栃木県におけるノビタキの繁殖分布とその環境について興味を持ち、調査を行ってきた。この論文では、現地調査や過去の資料をもとに栃木県におけるノビタキの繁殖分布と繁殖環境について述べるとともに、近年における日光戦場ヶ原のノビタキの減少について報告する。

ある種の生息分布とその環境とのかかわりを詳しく調べることは、その種の保護に必要不可欠なものである。今後、局地的な分布をもつ種や、生息個体数が少ない種において、この種の調査が広く行われることを希望する。

### 調査地および調査方法

調査は、栃木県全域を対象に行った。

栃木県におけるノビタキの繁殖分布と環境を明らかにするために、聞き取り調査と現地調査を行った。

聞き取り調査は、日本野鳥の会栃木県支部の会員を対象に行い、同支部機関紙を通してノビタキの記録の収集に努めた。また、広く県内を観察している18名の会員を対象に、ノビタキの記録の有無を直接電話や手紙で問い合わせた。問い合わせた項目は、観察地、観察日、個体数や繁殖の有無などの生息状況、植生、草丈、樹木の有無、面積などの環境、そして標高である。

現地調査は、1983年5月中旬から7月にかけて、栃木県内の平野部から山岳地域にいたる各種草原12ヵ所を対象に行った。これら草原は、工業団地造成地や牧草地、湿原、山岳地帯の風衝草原と多様である。このような草原を対象としたのは、文献などから本州におけるノビタキの生息環境が「草原」であることがわかり、上記12ヵ所ではその生息の可能

---

1983年9月13日受理

1. 〒321 栃木県宇都宮市峰町408

2. 〒321 栃木県宇都宮市峰町265 菊地荘

性が考えられたからである。

現地調査は、調査期間中それぞれの草原へ少なくとも1回は訪れ、道路沿いに歩きながら見える範囲で調査を行った。このとき、25倍の望遠鏡および7~9倍の双眼鏡を用いた。また、全域が一望できる所では、1ヵ所から望遠鏡と双眼鏡で1時間以上の定点観察も合わせて行った。調査にあたっては、ノビタキの生息の有無、個体数、繁殖の状況のほか、草原の面積、標高、草丈、樹木の有無など環境についても詳しく調べた。各調査地の環境については結果で述べる。

なお、繁殖の判断には、巢卵、ヒナの観察のほかに、5月中旬から7月にかけての本種の繁殖期における成鳥の観察記録をも含めた。

## 結 果

栃木県におけるノビタキの繁殖分布とその環境について、1)生息が確認できなかった地域、2)生息を確認した地域（ただし、今回の調査では生息は確認できなかったが、過去の記録からその可能性の高い地域もこれに含めた）の2つに分けて、順次観察結果とその地域の環境について述べる。

### 1. ノビタキの生息が確認できなかった地域

#### 1) 芳賀郡芳賀町下高根沢（標高約130m）

ここは、工業団地造成地として開発された平坦地で、約2km×1kmの範囲にわたって草原が続いている。おもに背丈が1.5m前後のススキやシロザ、マツヨイグサなどで覆われているが、一部には背丈が20cm前後のイネ科の牧草地がある。周囲は、クヌギ、コナラ、アカマツなどの雑木林で囲まれている。1983年6月16日、7月27日に調査を行ったがノビタキの生息は確認できなかった。この地域で定期的に観察を行っている関功氏もノビタキの生息は確認していない（関功氏からの私信）。

#### 2) 塩谷郡塩谷町佐貫（標高約250m）

鬼怒川の河川敷に広がった平坦な牧草地で、約2km×500mの範囲に草丈の50~80cmイネ科の牧草やカヤツリグサ科の草本が繁茂し、ところどころに樹高2~3mのアカマツがある。また、草地の周囲には高さ約1mの牧柵がある。1983年6月18日に現地調査を行ったが、ノビタキの生息は確認できなかった。

#### 3) 那須郡西那須野町十本松牧場（標高約350m）

アカマツ林に囲まれた平坦な牧草地で1区画約500m×500mの牧草地が多数ある。草丈約30~50cmのイネ科およびツメクサ類の牧草が繁茂しており、草原内に高さ約1mの牧柵があるところもある。1983年6月18日、6月26日に調査を行ったが、ノビタキの生息は確認できなかった。この地域で観察を続けている菊地知義氏も、繁殖期におけるノビタキの生息は確認していない（菊地知義氏からの私信）。

#### 4) 日光市奥日光涸沼（標高約1,500m）

この地域は三岳、倶羅山、山王帽子山にかこまれた平坦地で、周囲約1kmの乾性草原である。その多くは草丈が30cm以下のスゲ類やササ類に覆われ、草原内に樹木や背の高い植物はほとんどない。草原の周囲には樹高約1.5~3mのズミの低木もみられるが、著しく少ない。その外側は、オオシラビソ、コメツガなどの針葉樹林となっている。1983年7月19日、全域を見渡したが、ノビタキの生息は確認できなかった。また過去における繁

殖の記録もない(宇都宮大学探鳥会 1980, 日本野鳥の会栃木県支部 1981)。

#### 5) 塩谷郡架山村鬼怒沼(標高約2,000m)

周囲約1.3kmの高層湿原で、大小約100の池塘を有する。スゲ類、ミズゴケ類を中心に草丈10~30cmの植物で覆われ、湿原内には樹木や草丈の高い植物はほとんどない。湿原の周囲は、オオシラビソ、クロベなどの針葉樹林となっている。1983年7月28日に調査を行ったが、ノビタキの生息は確認できなかった。また、1981年7月22日、同地域を訪ずれた戸井田恵二氏も生息を確認していない(戸井田恵二氏からの私信)。過去における繁殖の記録もない(日本野鳥の会栃木県支部 1981)。

#### 2. ノビタキの生息が確認された地域

##### 1) 上都賀郡足尾町松木沢(標高約700m)

松木沢沿いに広がった約1km×300mのなだらかな草地である。この一帯は、足尾銅山の鉱毒により樹木が枯死し岩肌があらわれたところに緑化計画が進められている地域である。イタドリ、ススキなどが一面を覆い、ところどころそれらの植物が高さ約1.5m前後に突きでている。また、樹高約3m前後のヤシヤブシもわずかにみられる。1983年5月27日、約600m×200mの範囲に囀る4羽の雄と雌2羽を観察した。巣卵の確認は得られなかったが、抱卵中と思われた。この地域における過去の記録は、1982年5月下旬に雄1羽が観察されている。また、1981年5月下旬には、この地域から約1km離れた斜面で1つがいが観察されている(以上、池田秀樹氏からの私信による)。

##### 2) 上都賀郡粟野町横根山(標高約1,200m)

この地域は前日光牧場と呼ばれ、道路沿いのなだらかな斜面に約2km×50~200mの範囲で牧草地が広がっている。草丈10~30cmの牧草の中に、樹高5~10mのシラカンバやミズナラ、ズミが散在する。沢沿いにはヤナギの小規模なブッシュがある。また道路沿いには、有刺鉄線を4列にはった高さ約1.5mの牧柵がある。牧場の周囲は、ミズナラなどの広葉樹林である。1983年7月23日、約1時間調査を行ったが、ノビタキの生息は確認できなかった。しかし、この地域で観察を続けている渡辺知義氏は、1980年5月24日1巢4卵を確認、'81年6月2日、7月4日各雄1羽、'82年7月20日囀り声確認、'83年7月3日雄1羽を観察している(渡辺知義氏からの私信)。

##### 3) 今市市(一部塩谷郡栗山村を含む)大笹牧場(標高1,200~1,300m)

日光霧降高原の北側に位置し、大笹山のなだらかな斜面にひろがった面積326haの牧草地である。多くは草丈30cm以下のイネ科の牧草に覆われているが、沢沿いや道路沿いには、高さ1.5~2mのウツギやヤシヤブシの低木のブッシュがある。道路沿いには高さ約1mの牧柵が続いている。調査は、霧降高原有料道路沿いに行った。1983年6月29日、7月19日、それぞれ囀るノビタキの雄1羽を観察した。時期的にみて繁殖していると思われる。

##### 4) 日光市奥日光戦場ヶ原(標高約1,400m)

周囲を2,000m級の山々に囲まれた約400haの高層湿原である。湿原は、大部分がスゲ類やミズゴケ類を中心とした草丈50cm以下の植物で覆われており、樹高1.5~2mのシラカンバやカラマツの樹木が散在している。近年は乾燥化が進み、周辺にゆくにしがいのレンゲツツジやホザキシモツケが繁茂し、周囲はズミの低木林となっている。調査は、おもに自然観察道と国道120号線沿いに見える範囲で行った。1983年5月中旬から7月にか

けて、赤沼から青木橋にいたる自然観察道、赤沼から三本松にいたる国道沿い、逆川から湯滝自然観察道にいたる歩道で、少なくとも8つがいのノビタキの生息を確認した。このうち、2つがいについては、巣立後まもないヒナを観察し、繁殖を確認した。過去において、湿原全域におけるノビタキの生息数を調査したことはないが、1978年6月1日、国道と開拓村に囲まれた約600m×200mの地域でノビタキの雄10羽を観察した。1982年、1983年、同じ範囲でノビタキ1つがいを観察された。

#### 5) 日光市奥日光小田代ヶ原 (標高約1,400m)

戦場ヶ原の西側に位置し、周囲約3kmの乾燥草原である。草原の中央付近はやや高くホザキシモツケやズミのブッシュがみられる。それ以外の地域は、草丈が20cm以下のササ類やスゲ類を中心とした草原で、樹高2m前後のシラカンバやズミの低木がところどころにみられる。調査は、草原の周囲の自然観察道沿いに行い、ほぼ全域を見渡した。1983年6月29日に争う2羽の雄、7月26日雄1羽をそれぞれ観察した。戦場ヶ原同様、過去におけるノビタキの生息数について調査されたことはないが、以前から継続的に生息が確認されている。たとえば、1965年7月4日、巣立ち後のヒナ多数観察(神山忠士氏からの私信)、1964年5月12日、雄2羽雌1羽観察(御厨正治氏からの私信)。

#### 6) 日光市霧降高原 (標高1,500~1,600m)

霧降高原スキー場から丸山(標高1,689m)にかけてのゆるやかな斜面である。この地域の環境は、風衝草原で風に倒された草丈約20cm前後のササ原に、ところどころ樹高約1.5~3mのシラビソ、ダケカンバの低木や樹高約1.5~2mのコメツツジの茂みが散在している。1983年7月19日、リフト駅から約700mの距離で2つがいと雄2羽の計6羽のノビタキを観察した。また、1982年6月12日には囀るノビタキの雄3羽を観察した。

#### 7) 那須郡那須町那須岳 (標高1,600~1,800m)

おもに茶臼岳(標高1,917m)から朝日岳(同1,903m)三本槍岳(同1,916m)にいたる登山道の東斜面である。茶臼岳から朝日岳にかけては岩場が多く、ガンコウランやシラタマノキなどの著しく背丈の低い植物が群生している。朝日槍から三本槍岳にかけては、なだらかな斜面が多く、マルバシモツケ、ガンコウラン、シラタマノキの背丈の低い植物にまじって、樹高約1~1.5mのハイマツやナナカマド、ミネザクラなどの矮小木が群生している。今回の調査では都合により朝日岳から三本槍岳にかけての地域の調査は行えなかった。過去の記録から、1972年5月22日清水平(標高1,800m)にて雄1羽(山崎治行氏観察)、1974年7月16日峰の茶屋下方(標高1,600m)にて雄1羽(御厨正治氏観察)、

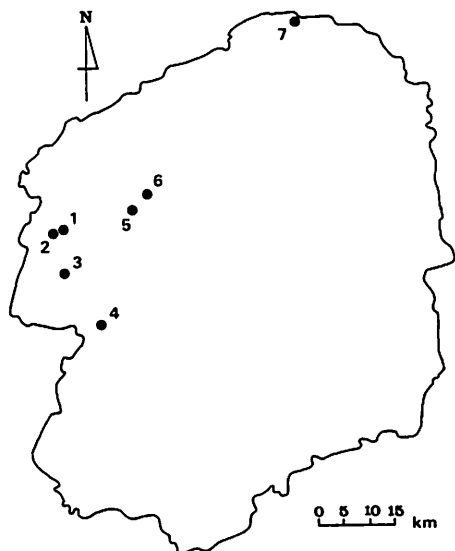


図1 栃木県におけるノビタキの繁殖分布  
1.日光戦場ヶ原 2.小田代ヶ原 3.足尾町松木沢 7.横根山 5.霧降高原 6.大笹牧場 7.那須岳  
Map of breeding distribution of Stonechats in Tochigi Prefecture.

1979年6月10日茶臼岳東斜面にて囀る雄2羽, 1980年7月20日清水平にて雄1羽, 朝日岳東斜面にて幼鳥1羽観察(平野観察)の記録がある(以上, 日本野鳥の会栃木県支部 1981)。さらに, 1982年5月5日雄1羽が高橋良寿氏によって観察された(高橋良寿氏からの私信)。これらの記録から那須岳のおもにハイマツ帯ではノビタキが繁殖していることはほぼ確実である。

以上のことから, 栃木県における繁殖期のノビタキの生息地は, 足尾町松木沢一帯, 栗野町横根山, 日光戦場ヶ原, 小田代ヶ原, 霧降高原, 今市市大笹牧場, 那須町那須岳の7地域であった(図1)。一方, 聞き取り調査からも, これら7地域以外からのノビタキの生息記録は得られなかった。ノビタキの生息数は, 足尾町松木沢, 日光戦場ヶ原, 霧降高原では比較的多数のノビタキを確認したが, 栗野町横根山, 小田代ヶ原, 今市市大笹牧場, 那須町那須岳では, 1~2羽の生息を確認しただけである。したがって後者の4地域では, ノビタキの生息数は著しく少ないと考えられた。

### 考 察

栃木県において, ノビタキの繁殖期の生息が確認された地域の標高は, 足尾町の海拔700mから那須岳の海拔1,800mの間であった。また, 平野部の草地からはノビタキの生息記録は得られなかった。このような栃木県におけるノビタキの生息地の標高は, 清棲が報告している本州における他地域の標高とほぼ一致していた(清棲 1978)。

しかし, 日光溜沼と栗山村鬼怒沼では, 標高的にはノビタキの生息が予想されたにもかかわらず, 生息は観察されなかった。その理由の1つとしては, 草原の面積の広さと関係があるかもしれない。今回, 栃木県に限ったため調査地が少なく, 正確なことは明らかではないが, 上記2地域はノビタキの生息が確認された地域より狭い面積であることがわかっている。すなわち, ノビタキの生息が確認された地域のうち, 面積の測定可能な戦場ヶ原, 小田代ヶ原, 足尾町, 横根山では, 面積はそれぞれ約400ha, 約75ha, 約30ha, 約25haであった。それに対して, ノビタキの生息が確認されなかった溜沼と鬼怒沼は, それぞれ約8ha, 約13.5haと生息が確認された地域に比べて, 狭い面積であった。

別のもう1つの理由としては, 生息環境の違いが考えられる。すなわち, ノビタキの生息が確認された地域の環境は, 草丈が30cm~50cmの植物が覆った草原に, 樹高1.5m~3mのカラムツやシラカンバの樹木やススキなどの丈の高い植物が散在している地域である。また, 横根山や大笹牧場では, 有刺鉄線の牧柵が続いている。今回の調査では, 低木やススキの分散具合について, 充分調査することはできなかったが, その状況が比較的明らかである戦場ヶ原と足尾町について述べると以下ようになる。戦場ヶ原においては, ノビタキの観察頻度の高い地域では, 約25m×25mの範囲に, 樹高1.5m~3mのカラムツやシラカンバが, 少ないところで2~3本, 多いところでは10~12本あった。また, 足尾町では, 約25m×25mの範囲に, 草丈1.5m前後の周囲の草よりも高くつき出たススキやイタドリが, 少ないところで20%, 多いところでは60%の割合であった。それらは全体的に散らばっており, 一ヵ所に集中していなかった。また, 樹高3m前後のヤシヤブシは, 同じ約25m×25mの範囲で, 0~4本含まれていた。

Johnson (1971) は, Jersey で長期に渡ってノビタキを研究し, ノビタキのテリトリーには, 高さ1.5m以上のとまり場となる草や樹木が散在しなければならないという結論を

得た。上記の生息地の環境はこの報告と一致している。これは、草原につき出た草や木から地上へ飛びおりて食物を捕えるノビタキの採食方法から説明される。この草原の垂直構造からみると酒沼や鬼怒沼には草丈の低い草原のみで、「とまり場」となるような樹木や背の高い植物はほとんどなかった。

一方、塩谷町佐貫には、約100haの草原と樹高約2~3mのアカマツの立木、高さ約1mの牧柵があり、面積と環境においてはノビタキの生息が予想された。しかし、ノビタキの生息は確認できなかった。このことは、ノビタキの生息が面積と環境のほか、標高とかかわっていることをうかがわせる。すでに述べたように、栃木県においてノビタキの繁殖期の生息が確認された地域の標高は、海拔約700m(足尾町)~1,800m(那須岳)の間であった。佐貫の標高は約250mで、上記の生息地に比べ、著しく標高が低かった。

ところで、近年、高原の開発や観光化にともなって本州におけるノビタキの生息が危ぶまれている(日本野鳥の会 1978)。日光戦場ヶ原は、以前から本州における代表的なノビタキの生息地とされてきた。しかし、近年、日本野鳥の会栃木県支部の会員などから、ノビタキの生息数が減少したという声を聞くようになった。実際、筆者らも過去8年間戦場ヶ原で定期的に鳥を観察してきて、ノビタキの生息数が減少しているという印象を受けている。当地における詳しいノビタキの生息数について調査されたことはない。今回、戦場ヶ原では、周囲を歩いて少なくとも8つがいのノビタキを観察した。1978年6月16日に国道120号線の東側の約600m×200mの範囲で少なくとも10羽の雄を観察した。また、当時、ノビタキが多かったということは、赤沼の宇都宮大学日光演習林の敷地内の草原にも生息繁殖していた事実からもうかがえる。1975年6月6日1巢5雛、1978年6月15日5雛いる2巢を、演習林敷地内の草原で観察した。ところが、1982年、1983年の繁殖期には、1978年に10羽の雄が観察された同じ範囲にたった1つがいのみを観察したにすぎなかった。しかも、宇都宮大学演習林内の草原には1羽もみられていない。これらのことから、戦場ヶ原ではノビタキの個体数が減少していることは明らかである。

しかし、なぜ日光戦場ヶ原で近年になってノビタキが減少したかは明らかでない。1978年に調査を行った地域は戦場ヶ原の周辺部で、現在では、カラマツやシラカンバが樹高約1.5~5mに成長し、これらの密集部分も多くなっている。この樹木の成長が原因の一つであると考えられる。また、宇都宮大学演習林敷地内の草原は、宿舎の新築や植林したカラマツの成長などで、草原が狭くなっている。さらに、1982年の6月における豪雨による湯川の氾濫で、湿原が水をかぶったことで繁殖の成功率が著しく低くかったことも考えられる。事実、この水の影響でノビタキの巣が流されている(江川靖氏からの私信)。

今後、戦場ヶ原におけるノビタキの生息数の動向に興味を持たれる。

## 謝 辞

ノビタキの生息記録を得るにあたり、宇都宮大学探鳥会の金原啓一、桑原雅美、山内良隆の各氏には野外調査を協力していただいた。また、次の各氏にはノビタキの記録を快く提供していただいた。近沢良一、江川靖、池田秀樹、神山忠士、菊地知義、粉川駿一、蔵原惟光、黒田義夫、佐藤一博、関功、鈴木貢四郎、高橋良寿、戸井田恵二、渡辺知義の各氏。東京大学農学部の樋口広芳博士には、本論文を読んでいただき貴重な御助言をいただいた。これらすべての方々に厚くお礼申し上げる。

## 要 約

筆者らは、栃木県におけるノビタキ *Saxicola torquata* の繁殖分布と繁殖環境について調査を行った。繁殖記録を得るにあたっては、野外調査と文献調査、聞き取り調査を用いた。野外調査は、1983年5月中旬から7月にかけて行った。得られた結果は次のとおりである。

1. 繁殖期の生息記録は、日光戦場ヶ原、小田代ヶ原、霧降高原、足尾町、横根山、大笹山、那須岳から得られた。これらの地域の標高は、海拔700mから1,800mの範囲であった。平野部の草原からはノビタキの生息は確認できなかった。
2. ノビタキの繁殖環境は、高さ約1.5m以上の草や樹木、茂みが散在する草原であった。
3. 近年、日光戦場ヶ原では、ノビタキの生息数が著しく減少している。

## 参 考 文 献

- JOHNSON, E. D. H. 1971. Observations on a resident population of stonechats in Jersey. Brit. Birds 64: 201—13, 267—79.
- 清棲幸保 1978 増補改訂版. 日本鳥類大図鑑 I. 講談社, 東京.
- 日本野鳥の会 1980 鳥類繁殖地図調査 1978. 日本野鳥の会, 東京.
- 日本野鳥の会栃木県支部 1981 栃木県産鳥類目録. 日本野鳥の会栃木県支部, 宇都宮.
- 宇都宮大学探鳥会 1980 行事における鳥の記録. 宇都宮大学探鳥会会報こまどり, 18: 17.

Breeding Distribution and Breeding Habitats of the Stonechat  
*Saxicola torquata* in Tochigi Prefecture

Koichi Endo<sup>1</sup> and Toshiaki Hirano<sup>2</sup>

The breeding distribution and breeding habitats of Stonechats *Saxicola torquata* were investigated in Tochigi Prefecture, central Honshu. The breeding records were gathered through field work, literature, and personal communications. The field work was carried out from May to July in 1983. The results obtained were as follows:

1. The breeding records were obtained in Senjo Plain, Odashiro Plain, Kirifurikogen, Ashio, Mt. Yokone, Mt. Ohsasa, and Mt. Nasu. These areas range from 700 to 1,800 m in altitude above sea level. Stonechats were not observed in lowland grasslands.
2. The breeding habitats are grasslands with scattered shrubs of 1.5 m in height.
3. Recently there has been a marked decrease of breeding populations of Stonechats in Senjo Plain, Nikko.

1. 408 Minemachi, Utsunomiya-shi, Tochigi 321.
2. c/o Kikuchi-so, 265 Minemachi, Utsunomiya-shi, Tochigi 321.